

箱庭におけるへびの意味について

新 保 和 也

箱庭におけるヘビの意味について

新 保 和 也

要 旨

本研究の目的は、箱庭におけるヘビの意味について検討することである。調査協力者は大学生および大学院生の7名である。手続きとしては、調査協力者に箱庭の制作をしてもらった後、箱庭の説明や感想などについてインタビューをした。さらに、制作された箱庭にヘビのミニチュアを追加してもらった後、ヘビに関するインタビューをした。インタビュー内容は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析をした。結果として13の概念が生成され、5のカテゴリーに分けられると考えられる。(1) 動物的側面、(2) 人間との関わり、(3) 神話や伝承との関わり、(4) 神聖化、(5) 擬人化である。

キーワード：箱庭 ヘビの意味 ミニチュアの追加

目 次

第Ⅰ章 背景と目的	
第1節 箱庭療法について	
第2節 象徴的理解	
第3節 ヘビのイメージに関する研究	
第4節 ヘビが箱庭で使用される事例について	
第5節 目的	
第Ⅱ章 方法	
第1節 予備調査	
第2節 本調査	
第Ⅲ章 結果	
第Ⅳ章 考察	
第Ⅴ章 結論と課題	

フェルト (Lowenfeld, M.) によって、1929年に、子どものための心理療法の一手段として考案されたものである。その後、彼女に教えを受けたカルフ (Kalff, D.) は、ユング (Jung, C. G.) の分析心理学の教えを導入して、スイスにおいて、これを成人にも効果のある治療法として発展させた」(河合, 1969)。この方法は、棚に置かれている玩具を適当に選び、砂の入った箱に、何らかの表現をさせるものである。玩具では、「用意すべきものとしては、人、動物、木、花、乗り物、建築物、橋、柵、石、怪獣などである」(同上)。その動物において、「野獣と家畜、鳥類、貝、魚、それに蛇や蛙は大変重要であるとしている」(同上)。

第2節 象徴的理解

象徴について河合 (1967) は、「ある比較的未知なものを表現しようとして生じた最良のもの、その他にはこれ以上適切な表現法が考えられないという場合である」としている。

第Ⅰ章 背景と目的

第1節 箱庭療法について

「箱庭療法は、ロンドンにおいてローエン

箱庭作品を心像としてとらえるうえで岡田(1984)は、多かれ少なかれ作品は象徴化されており、象徴的理解が必要であるが、図式的な象徴的理解に陥らないように注意が必要であり、むしろ、そのような象徴的理解に疑問をもち、それがどの程度普遍性があり、妥当性があるかを検討している。

Vries, A. (1984)によると、ヘビは、すべての原初の宇宙の力を表すという曖昧性を持ち、神々との関連、邪悪、生命・治癒力、悠久・豊穡・再生、大地・冥界、水、宝の番人、死霊、男根、太母神などの象徴的意味をもつとしている。

このことに加えて、「ミニチュア玩具が引き出すイメージは多義的なものである」(弘中ら, 2002)ことから、ヘビのミニチュアは、他のミニチュアと比べて曖昧性が強いと考えられる。このことは、象徴的な理解をするにあたって、様々な意味をもつ可能性の広がり、それによる理解の困難さが生じると考えられる。

第3節 ヘビのイメージに関する研究

岡田(1984)はSD法による動物イメージにおいて「ヘビは『男性的、深い、動的、閉鎖的、不安定な、暗い、不調和な、アブノーマルな、さびしい、緊張した、不愉快な』感じがいだかれ、印象深く、否定的な動物としてイメージ化されている」と分析している。

西海(2018)のヘビに対する印象差異の研究において、高等学校教諭や、保育士、野外インストラクター、自然ガイド、野外安全管理指導者などで構成された指導者層と比べて、「自然生物に関わる業務には就いておらず、野外レジャーも年に数回程度か、それ以下しか野外活動を行わない者」と定義された一般層がもつヘビに対する印象は、より利用できず、より男性的で、より濁っていて、より荒々しく、より嫌いで、より汚い存在と認識している傾向が認められたとしている。以上の研究から、箱庭制作において、ヘビが選択されない可能性が考えられる。

岡田・木村(1980)は、箱庭作品におけるヘビの意味について検討している。「筆者らの持っている作品及び他の治療者から借用した若干の作品中から、ヘビが出現しているもの68個を抽出し、分析対象とした」ものである。結果は使用頻度、使用された領域、使われ方、ヘビの意味、現れ方についてである。ヘビの意味については「制作者による意味の説明からの分類ではなく、筆者らが作品を見て、その印象から推測、意味づけをして分類した」とある。考察においては治療の実際と関係づけて考えており、先導的な役割を持ったヘビと不気味なもののごめきの存在としてのヘビの持つ意味が、制作者の不安や恐怖の表現ではないかと考察している。

鑑(1973)は、夢を中心的素材として、ヘビのイメージがどのような人間の経験、情動性を表現しているかを検討している。ヘビのイメージについて、「生と死、秩序(定形)と無秩序(無定形)、柔軟さと硬さ、直線と円、不動と素早さなど対立するイメージないし、表象をこれ程豊富に、しかも見事にもつことのできる動物を蛇以外に見出すことは困難であろう」と考察している。

第4節 ヘビが箱庭で使用される事例について

箱庭療法学会による機関誌、『箱庭療法学研究』第1巻第1号(1988)から第35巻第1号(2022)までの原著、研究報告、外国語論文、資料のうち、事例論文から、写真を手がかりにヘビのいる箱庭を探した。

その結果、事例は合計98名であった。内訳は男性53名のうち、年中1名、年長1名、小学生21名、中学生10名、高校生3名、大学生3名、成人13名、および「少年」1名である。女性は45名のうち、年長2名、小学生11名、中学生4名、高校生3名、大学生8名、成人17名である。なお成人は18歳から60歳代としている。

第5節 目的

ヘビという象徴性が高いミニチュアの使用に

について、実際に箱庭を制作してもらい、制作者にインタビューをして、その意味や役割について検討することを目的とする。

第Ⅱ章 方法

第1節 予備調査

調査の進め方や質問内容を検討するために予備調査を行った。調査協力者は、関東の私立大学の大学院生2名である。はじめに箱庭を自由に制作してもらい、インタビューをした。次に、調査協力者の目につかないように箱に入れておいたヘビを見せて選択してもらい。そして、佐々木（2011）の研究手続きをヒントに、ヘビのミニチュアを制作された箱庭に追加してもらい、インタビューをした。その結果、ヘビのミニチュアには、色味や大きさのバリエーションが必要なことと、質問内容の検討が必要であることがわかった。

第2節 本調査

第ⅰ項 調査機関と実施場所

調査期間は2024年7月下旬から9月下旬で、実施場所は東京国際大学臨床心理センター内にある、白い砂の入った砂箱とミニチュアが置かれているプレイルームで行った。

第ⅱ項 調査協力者

本研究における調査協力者は、関東の私立大学および大学院の学生7名（男性4名、女性3名）である。第1章、第4節のヘビが使用される事例の割合から、男女差が大きく開かないようにした。研究協力の募集では、調査者が口頭での呼び掛けと募集要項の文書で示した。また、箱庭の制作中、特にヘビのミニチュアを追加する際に、不安や緊張などの不快な感情を喚起される可能性も考えられるので、調査者は、ヘビのミニチュアを扱うことを口頭で伝え、募集要項の文書と同意書に明記している。同意した協力者には、調査を実施し、謝礼として1,000円分のギフトカードを渡した。

第ⅲ項 手続き

調査の始めに、調査の概要、得られたデータは研究目的以外に使用しないこと、個人が特定されないよう配慮すること、制作中はいつでも中止できることが記載されてある同意書を取り交わした。

箱庭を制作してもらい、教示は「この砂箱とミニチュアで好きなように作ってください。出来たら教えて下さい」と伝えている。制作後、箱庭の説明や感想について、インタビューをした。質問は「この箱庭について教えて下さい」、「この辺はなんですか」、「作ってみてどうでしたか」などである。

次に、調査協力者の目につかないように、箱に入れておいたヘビのミニチュアを見せて選んでもらい、初めに制作した箱庭に追加してもらった。これは、調査協力者に、ヘビのいる箱庭といない箱庭で比較をしてもらうことで、ヘビについての気づきや、感じることなどが生じると考えられるためである。追加する際には、箱庭表現の変更を自由にしても良いとした。そして、ヘビの追加後にインタビューをした。質問内容は、以下の通りである。

- (1) ヘビを追加してみて、どんな感じがしましたか。
- (2) 初めに作った箱庭と比較して、どのようなことを感じますか。
- (3) このヘビは何をしていますか。
- (4) このヘビを選択した理由はなんですか。
- (5) これらのヘビ（使用しなかったもの）を選択しなかった理由はなんですか。
- (6) 追加するものが例えばウマ（他の動物）であれば、ヘビと比較してどんな感じになりますか。

さらに、箱庭が変化したと思われる表現についてなど、質問を補足的に行った。インタビューは半構造化面接で行った。

第ⅳ項 補足

見た目や大きさといった、プレイルームに置かれていないヘビのミニチュアは、調査者が紙

粘土等で作成、用意をした。

質問 (6) において、ウマである理由は、岡田 (1984) のSD法で、「まとまった、豊かな、のびのびした、動的、成熟した、開放的、大きい、明るい、強い、充実した、調和した、積極的、ノーマルな、愉快的」感じが抱かれるとされ、ヘビとは反対の肯定的印象を示していると考えられるためである。

第v項 分析方法

インタビューでは録音をし、音声データを逐語化している。データの分析方法は仮説生成のため、木下 (2007) の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下M-GTA) を用いた。M-GTAは、データを分析者と切り離れた位置づけとして分析対象とすることで、分析プロセスを説明可能な形にする。切片化してラベル化から始めるのではなく、データのもつ文脈を壊さずに、意味の深い解釈を試みるという特性もっている (木下, 2007)。

分析でははじめに、インタビューから逐語化した音声データから、分析の対象となる概念を抽出していき、ワークシートにする作業を、調査協力者1人ずつ行った。ワークシートには、具体例となる音声データ、概念の定義、概念名、理論メモを記入した。次に、既存の概念に類似する音声データを具体例に追加し、新たな概念の生成を行った。その後、生成した各概念について検討し、類似した概念をまとめてカテゴリーを生成した。最後に、概念やカテゴリー関係から分析結果をまとめた。

第Ⅲ章 結果

分析の結果、13の概念と5のカテゴリーが生成された。以下に生成されたカテゴリーと概念の表 (表1) とカテゴリー関連図 (図1) を示した。なお、調査協力者はAからGで示し、【】はカテゴリー名、[] は概念名を表す。

カテゴリー関連図は、カテゴリー同士の関連、関係を示しており、矢印はヘビのイメージや意味をもつ流れや経緯として考えられる。以下に各カテゴリーおよび概念についての結果を述べる。

【動物的側面】は、[囓む攻撃性]、[毒をもつ強さ]、[隠れるもの] の概念でまとめている。これら以外に、「最初、自然だけ置いてたわけなので、ヘビ置くまでは、まあアヒルとかカエルとかカメの数匹しかいなかったんですけど、ヘビを何匹か置くことで、生命感じゃないですけど、まあ命あるものが置かれて、ちょっとだけ生き生きしてる感じが、ちょっと出たんじゃないかなとは思いますが」(C)、「貝殻を卵に見立てて、置いてみて、で、それを守る、温めるペンギンを置いて、それを狙ってるヘビと、これが草むらとかの中で、狙ってるイメージ」(B)、「山の方に白いヘビいると嬉しいなと思ったので」(F)、「これ (茶色のヘビ) は川から上がってきて、この街をみるヘビ。これも、これ (白いヘビ) は海から出てきて」(E) と概念にはならなかったが、ヘビの動物的側面について語られた。

[囓む攻撃性] は、インタビューでは、「ヘビはなんかあまり隙を見せないと、噛みついてこないみたいな」(B)、「ヘビは、ちょっと怖い、噛まれるとか攻撃を向こうからしてくるのかなあ」(G)、「なんか悪い人には噛みついたり、天罰を与えたりして、良い人には別に何もしない」(E) などが語られ、比較的が多い結果となった。囓む攻撃以外に、巻き付く攻撃は、あまり語られなかった。[囓む攻撃性] は [毒をもつ強さ] と関連し、【人間との関わり】においては [存在としての恐怖]、[人間への攻撃]、[嫌悪感] に影響すると考えられる。

[毒をもつ強さ] は、インタビューでは、「すごい強い毒を持っているっていうお話じゃないですか、なんでまあ場所を守るとしては、最適かなって」(C)、「好戦的だったり、毒持ったりもするし、そのイメージがあるから。ワンチャン動物も死ぬし、ヘビだったら」(G) な

表1 生成されたカテゴリーと概念

カテゴリー	概念	定義	バリエーションの例
動物的側面	囓む攻撃性	囓むイメージ	B「ヘビはなんかあまり隙を見せない、囓みついてこないみたいな」
	毒をもつ強さ	毒があると強い	C「その子はすごい強い毒を持っているっていうお話じゃないですか、なんでまあ場所を守るとしては、最適かなっていうところで、コブラを選んだのが1つ。」
	隠れるもの	隠れるイメージ	B「まあヘビだったら、潜んで、一気にガッていくイメージだったので、この木の陰と草の陰から狙ってるみたいなの、感じにしましたね。」
人間との関わり	存在としての恐怖	恐怖の対象	G「なんか最初追加する時に、ヘビがここ(制作した箱庭)へ来るのか、どうなるのかなあってちょっと怖い気持ちもあったんですけど」
	人間への攻撃	人間を攻撃する	E「ここに来る人を警戒して、なんか、悪そうだったら噛みつくタイプのヘビ。」
	嫌悪感	嫌な印象を受ける	F「嫌ななって(笑)。まあ居てほしくないですよね。」
	居場所の分からなさ	居場所が分からない	A「やっぱね、ヘビってこう、なんか、どこからでも出てくるし、どこに居るか分からない。」
伝承や神話との関わり	伝承や神話との関わり	伝承や神話と関わる	F「かなりの大蛇つすよね、もう。マンションにとぐる巻けますからね。なんか、世界樹に巻くウロボロスみたいな。」
神聖化	神聖なもの	ヘビそのものが神聖	A「これはなんか、なんでしょう、たまたま登りやすいところに登った、神聖な大蛇。」
	白いヘビの神聖さ	白いヘビは神聖	C「白いヘビは昔から神聖とも言われてるので。」
擬人化	神聖なものの守り	神聖なものを守る	E「この神社の横のヘビは神社を守ってる感じだけど、このグルグル巻きヘビはこっち側の街を、なんか見守ってる。」
	狡猾さ	狡猾なイメージ	D「ヘビってなんか頭良さそうだなってイメージがあって、あの果実を食べさせたかもしれない。で、追放したっていう、たぶん、ヘビの狡猾さってそこからなんだと思う(笑)」
	侵入	侵入するイメージ	D「あのホントにあの、人の身体の中に入り込んでいうこともあるかもしれない(笑)。」

どが語られた。【人間との関わり】においては、[存在としての恐怖]、[嫌悪感]に影響すると考えられる。

「隠れるもの」は、インタビューでは、「森の

中に潜んでるヘビで、なんか、なんだろ、警戒してる」(E)、「潜んで、一気にガッていくイメージだったので、この木の陰と草の陰から狙ってるみたいなの」(B)、「こっちは森で(へ

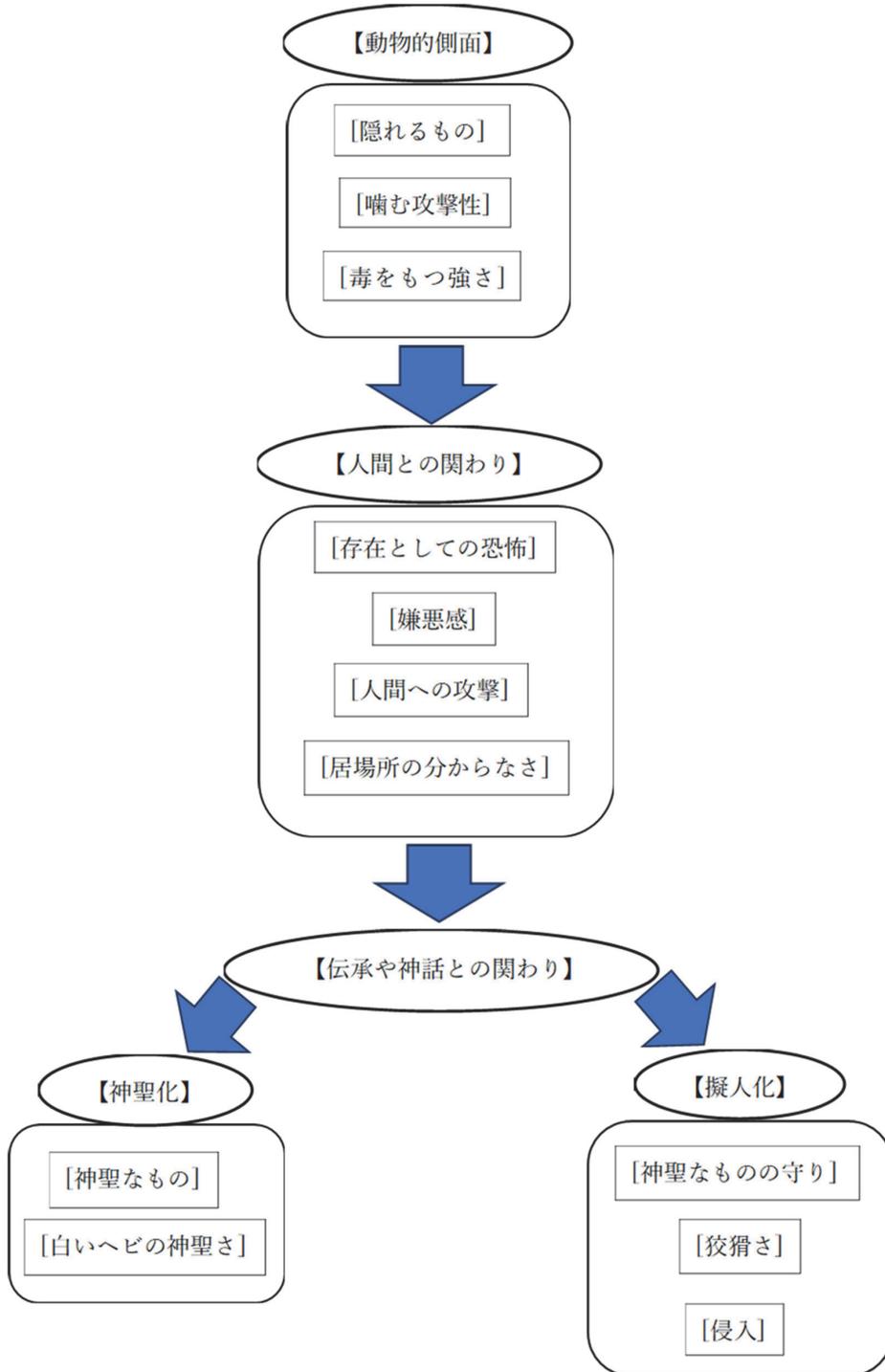


図1 カテゴリー関連図

ビが隠れるって感じがあるけど」が語られた。調査協力者の箱庭では、茂みのミニチュアで隠されるヘビの表現や、ヘビとその近くの木を関連付けた語りがみられた。[隠れるもの]は「居場所の分からなさ」に関わると考えられる。

これらの【動物的側面】が【人間との関わり】をもつことで、[存在としての恐怖]や「人間への攻撃」、[嫌悪感]、[居場所の分からなさ]が生じると考えられる。

[存在としての恐怖]は、インタビューでは、「いるかなあ分かんない、畑に居ても良いかな、怖いけど」(F)、「パッと現れて、こう侵食する感じというか、恐ろしいってところから、悪い事したら、やられる(笑)のイメージ」(E)などが語られた。[存在としての恐怖]は「人間への攻撃」、[嫌悪感]と関連すると考えられる。

[人間への攻撃]は、インタビューでは、「お姫様、お嬢様がヘビに騙されたかなんかして、殺されてしまった」(D)、「ダメだった人は、その金閣の前にいるヘビに食べられてしまう」(B)、「ここに来る人を警戒して、なんか、悪そうだったら嘔みつく」(E)などが語られた。調査協力者の箱庭では、ミニチュアの白雪姫を逆さまにして、ヘビによって殺される表現がみられた。

[嫌悪感]は、インタビューでは、「なんかヘビに似合うような感じだなあって思って、なんか不気味さが増したというか」(D)、「あんまり好きじゃない、ヘビが苦手なので、なんかこう、退けたいって感じ。」(E)、「嫌だなって(笑)。まあ居てほしくはないですよ」(F)などが語られた。調査協力者の箱庭では[嫌悪感]を表現したものとして、ヘビが端に置かれた。

[居場所の分からなさ]は、インタビューでは、「どこからでも出てくるし、どこに居るか分からない」(A)、「もうどこにいるのか分からない、パッと現れるから」(E)などが語られた。また、居場所以外に、「あと顔、表情も無いし、分かんない！どこに行くかも分かんないし、何考えてるかも分かんない」(A)、「予

測ができない、感じ、何をするのか分からないし、動き方も分からないし」(E)と語られたが、概念にならなかった。

これらの【人間との関わり】から、【伝承や歴史との関わり】をもつことで、神聖な扱いをされる歴史として、宗教、神話に繋がると考えられる。インタビューでは、「ヘビはキリスト教のモチーフだと思ったので」(A)、「アダムとイヴに出てきた」(D)、「宗教的なやつで、なんかどっかでヘビ、崇めてた気がするなあ」(E)などが語られた。調査協力者の箱庭では、【伝承や歴史と関わり】をもつという直接的な表現はあまりみられなかった。

その【伝承や神話との関わり】から、【神聖化】や【擬人化】が生じると考えられる。【神聖化】は、[神聖なもの]や「白いヘビの神聖さ」の概念でまとめている。

[神聖なもの]は、インタビューでは、「ただある神聖な神みたいなのが、この場合だと、ヘビのみを神聖と認めて、あの、そこにただいる」(A)、「ヘビは、まああの、俗に神聖な生物としての、言われてたりするので」(C)、「ヘビが神聖的なイメージもちょっとあった」(E)などが語られた。調査協力者の箱庭では、神聖な領域に置かれたヘビや、神社の守護神として置かれたヘビがみられた。

[白いヘビの神聖さ]は、インタビューでは、「白蛇はやっぱり日本側に置きたい、仏教っぽい感じがしたから」(A)、「白いヘビは昔から神聖とも言われてる」(C)、「神の使いっぽいじゃないですか」(F)などが語られた。また、可愛いイメージや、守られるもの、居ると嬉しいと思うことも語られた。調査協力者の箱庭では、白いヘビを神聖なものとして、マリア像や仏像といった、他の神聖なものと一緒に置かれた。しかし、白いヘビを狡猾なものとして使用したと思われる調査協力者もいた。

【擬人化】は、[侵入]や「狡猾さ」、[神聖なものの守り]の概念でまとめている。[神聖なものの守り]は、インタビューでは、「キリストの像を恐ろしいヘビが守ってるって勝手に意

味を見出して」(A), 「神聖な場所としてそこにある。それを守るのがコブラたちみたいな」(C), 「この神社の横のヘビは神社を守ってる感じ」(E)と語られた。調査協力者の箱庭では、[神聖なものの守り]の表現として、ヘビはキリスト像やマリア像、仏像、神社などの近くに置かれた。

[狡猾さ]は、インタビューでは、「頭良さそうだなってイメージがあって、あの果実を食べさせたかもしれない、で、で、追放したっていう、たぶん、ヘビの狡猾さってそこからなんだと思う(笑)」(D), 「踏切はホントは渡っちゃいけないけど、なんかこう、(箱庭の砂の色に)同化させて、白にして、なんか、しれっと渡るみたいな(笑)感じですよ」(E), 「狡猾で、ズルってイメージがありますけど…」(F)と語られた。

[侵入]は、インタビューでは、「人の身体の中に入り込んでしまうっていうことも、あるかもしれない(笑)」(D), 「大きすぎちゃうと、なんか、うーん、もっと侵食されて、攻めてきたヘビになってしまえそう」(E)と少ない語りだが概念としている。調査協力者の箱庭では、トンネルの中に入ろうとするヘビとして表現された。

これら以外に、概念にならなかったが【擬人化】と思われるものとして、悪と関わるヘビが挙げられ、インタビューでは「やっぱりヘビって、なんかやっぱり悪者のイメージ」(D), 「男の子ごころでいうと、悪魔の使いっぽくてカッコいいみたいな」(F)と語られた。

第IV章 考察

はじめに、各カテゴリーおよび概念について、ヘビの生態、箱庭の事例や研究、民族誌などをふまえて考察をする。

【動物的側面】について、アフリカやジャングルといった自然がテーマで、他の動物とヘビが共に使用されている箱庭の事例としては、老松ら(1991)、木村(2001)、田中(2002)が挙

げられる。岡田・木村(1980)の研究において、単なる動物としてのヘビの意味が、自然がテーマの箱庭で多くの動物と共に使用されている、水を飲むなどの生活環境、生き方などの生態に基づく表現からきているならば、【動物的側面】はその意味と重なる部分があると考えられる。これらの事例と研究から、箱庭におけるヘビはその生態が反映される可能性があると考えられる。

生態の1つとして、[噛む攻撃性]の語りは比較的によく、イメージしやすいかもしれない。箱庭の事例において、ヘビが噛む表現をしたものは、辻(2012)、吉岡ら(2011)が挙げられる。高田(1993)、田中(1990)、野口(2020)の事例では、ヘビが襲うもの、攻撃するものとして表現されている。これらのことから、攻撃的な表現としてヘビが使用される可能性があると考えられる。

次に、ヘビが噛むことは[毒をもつ強さ]に繋がると考えられる。これはインタビューの語りのみで、調査協力者の箱庭で毒を表現したものはみられず、『箱庭療法学研究』(1988から2022)においても、ヘビの毒を表現したものは確認できなかった。

箱庭では表現されなかったが、ヘビのもつ毒のイメージは人間に恐怖や強さのイメージを与えられると思われる。荒川(1996)は「とくに現実には猛毒のコブラまでもが護法の神となり、王権のシンボルとなった」と述べている。吉野(1999)によると、毒で敵を倒す強さは、縄文人がヘビを信仰まで高めた要因の一つと考察している。このことから[毒をもつ強さ]は、【人間との関わり】のなかで、毒をもつヘビが力のあるものとしてイメージされると考えられる。この強さのイメージが【神話や伝承との関わり】をもつことで、【神聖化】に繋がると考えられる。

そして[隠れるもの]では、敵に見つからないようにする生態や、冬眠する生態などからイメージされると考えられる。ヘビが隠れる表現をした箱庭の事例は、岩岡(2010)、高野(1988)、大重ら(2007)が挙げられる。これらのことから、ヘビが隠されたり、埋められたり

などで使用される可能性があると考えられる。

【動物的側面】である噛みつきや、毒による死傷のイメージは【人間との関わり】のなかで「存在としての恐怖」に繋がると考えられる。ヘビと恐怖の繋がりにおいて、川合（2024）の視覚的な研究では、霊長類のヘビに対する素早い脅威反応は、ヘビ特有の鱗が関係しているという。このことから、箱庭における精巧な作りのヘビのミニチュアは、恐怖のイメージだけでなく、恐怖そのものの反応を引き起こす可能性が考えられる。ヘビが恐怖のものとして表現された箱庭の事例では、生島（2020）、織田（1996）が挙げられる。

その恐怖となる背景の1つとして「人間への攻撃」が挙げられる。インタビューでは、人間が殺されることや、食べられること、噛まれることが語られた。箱庭の事例において、人間がヘビに食べられる表現をしたものは、織田ら（2003）、尾上（2015）、萩原ら（2013）が挙げられる。これらのことから、人間を食べる表現としてヘビが使用される可能性があると考えられる。

次に恐怖の対象であり、人間が攻撃されることから「嫌悪感」に繋がると考えられる。箱庭の事例より、クライアントがヘビの「嫌悪感」について語られているものとして榎戸（1993）、伊藤（2005）、坂井（2018）が挙げられる。「嫌悪感」は、岡田・木村（1980）の研究において、不気味なもののごめきの存在としてのヘビの意味に類似すると考えられる。事例と研究から嫌悪感の表現として、ヘビが使用される可能性があると考えられる。

インタビューにおいて、ヘビの嫌悪感がありながらも、ポジティブな語りがみられた。「私自身ヘビがあんまり好きじゃない、ヘビが苦手なので、なんかこう、退けたいって感じ」と語った調査協力者は、箱庭の全面にヘビが置かれ、「なんか良い感じに置いて、結構こう置けると思わなかったです（笑）」と語った。また、「たとえ大丈夫だとわかってても、わかってても、生来無理なものはやっぱりありますよね」と

語った調査協力者は、白いヘビに対して、「色ですかね、珍しいもの好きなので、白いヘビって縁起も良いし、やったあって感じですね」と語った。

これは、ヘビがミニチュアなので扱うことができることや、ヘビのミニチュアが多種多様なので、それぞれの役割や意味に違いが生じると考えられる。ヘビを2種以上使った調査協力者は、異なる役割や意味を与えていた。また、箱庭の砂によるリラクセス効果や、守られた枠（木村、2019）によって安心、安全に表現できたことも考えられる。

そして、ヘビの恐怖と攻撃は、人間との距離の近さから生じると思われる。これは、「マムシ類は小型であるため攻撃範囲は30 cm程しかなく、かなり近づかなければ咬まれることはないが、実際にはかなり多くの人々が咬まれており、これは目の前にいても気づかない」（田原ら、2024）ことから考えられる。このように「隠れるもの」の生態が「居場所の分からなさ」、人間への攻撃」に繋がると考えられる。

インタビューでは、居場所以外に表情、思考、雌雄の判別、動きの予測の分からなさについても語られた。それらの分からなさは、ヘビが身近な存在ではないことから考えられる。そのため、ヘビに対する分からなさのイメージは、距離のある存在としての意味をもつ可能性が考えられる。意識から離れている意味としては、無意識的なものが挙げられる。

ヘビが無意識的なもの、またはそれと関わるものと解釈されている箱庭の事例として、三宅（2022）、太田（2011）、吉末（1990）が挙げられる。

Jung, C. G. (1999) は、「自己自身を表すものが竜や蛇によって脅かされるということは、獲得された意識が本能的なところ（ゼーレ）、すなわち無意識によってふたたび呑みこまれるという危険を指し示している」と述べている。Vries, A. (1984) によれば、ヘビは、理解し難い本能の領域や、原始的で本能的な無意識を表すとしている。

以上の【人間との関わり】から生じるヘビのイメージが、【伝承や神話との関わり】に影響すると考えられる。インタビューでは比較的多く語られ、ヘビの【伝承や神話との関わり】は大きいように思われる。小島ら(1991)は、「世界の諸民族には、蛇に関するいろいろな民俗が知られている。(中略)大部分は人類が文芸や宗教のなかにえがきあげてきた蛇である」と述べている。

Warburg, A. (1988)によると、ヘビの冬眠、脱皮、素早い動き、毒牙、人間の目に捉えられることが少ないこと、ファルスという特性が文学や芸術に、恐怖と和解をもたらす存在として登場するという。

そのような【伝承や神話との関わり】から【神聖化】に繋がると考えられる。箱庭の事例において、春日(2012)では、クライアントは「蛇は生きているけど、祀られている」と語られている。蛇を祀る神社として、佐太神社、出雲大社では、漂着したウミヘビが奉納され、龍蛇として崇められる。さらに、「蛇窟大明神とも称される上神明天祖神社(東京)ではシロヘビを神の化身であるとして崇めている」(茂木, 2018)。

[白いヘビの神聖さ]について、長谷川(2012)の研究では、制作者によって「スッと表れた白ヘビも、朽ちたマリアよりずっと崇高であり、嘘がなく、そして邪悪である。」と語られている。白いヘビが特別な扱いをされる背景として、神社の他に、「山口県岩国市およびその周辺地域にはアオダイショウの白化型個体群が生息し、地元の信仰の対象とされ、1924年に国の天然記念物『岩国のシロヘビ』に指定された」(上手ら, 2012)ことから考えられる。さらに、伊藤(2008)の研究によると、永遠と純潔は白を連想させる傾向にあることから、神聖さと繋がるかもしれない。

以上の【神聖化】は、岡田と木村(1980)の研究において、宗教的なもの、聖なるものへの志向としてのヘビの意味に類似すると考えられる。

【伝承や神話との関わり】は【神聖化】だけでなく、【擬人化】にも繋がると考えられる。ヘビが守るという【擬人化】は【伝承や神話との関わり】において、アレスの泉を護る大蛇の物語(安田, 1994)などが挙げられる。調査協力者の箱庭と語りから、[神聖なものの守り]がみられた。

箱庭の事例で塚田(1991)は、「左下の神社をヘビヤトカゲ、ムカデが守っているかのようにとり囲んでいる」と箱庭の説明をしている。尾上(2015)では、クライアントは「ピラミッドは4匹のヘビが守っていて、他の町の人が来たら1,000円で中に入れてくれる。」と語られている。

神聖なもの以外を守るヘビとして、調査協力者は「このグルグル巻きのヘビはこっち側の街を、なんか見守ってる」と語ったものが挙げられる。箱庭の事例において、KIM(2007)では、クライアントは「竜、骸骨の戦士、ヘビ、護衛は鐘の守護者です」と語られている。

これらの事例から、何かを守る表現としてヘビを使用する可能性があると考えられる。このことは、ヘビの[噛む攻撃性]や[毒をもつ強さ]、[人間への攻撃]といった攻撃的な側面が、守る役割に繋がると考えられる。

守り以外の【擬人化】としては、[狡猾さ]が語られた。【伝承や神話との関わり】においては、エデンの園の物語が考えられる。Clébert, J. P. (1989)によれば、ヘビは動物の中で最も狡猾であり、最も美しいものであったという。

調査協力者Eは「踏切はホントは渡っちゃいけないけど、なんかこう、(箱庭の砂の色に)同化させて、白にして、なんか、しれっと渡るみたいな(笑)感じですよ」と語られた。この内容は[狡猾さ]に当たると思われる。この語りは規則に従わない側面だけでなく、周囲の色に同化させる能力という2つの側面をもつと考えられる。

谷川(2012)は、古代人が蛇を「可畏(かしこ)き神」と呼んだのは、邪悪な毒をもつもの

が、同時に叡智を備えているという背反する属性に対する、畏敬の念の表現としている。このことから、ヘビが「狡猾さ」のイメージをもつ背景として、否定的な側面と、知恵や能力といった賢い2つの側面をもつことから考えられる。

〔侵入〕についてインタビューでは、侵入されて攻めてきそう、人の身体の中に入り込むと語られた。これらの語りは、人間的意味合いが含まれた侵入のイメージと考えられるため、【擬人化】としている。少ない語りでありながら概念としているのは、ヘビの長い身体によって箱庭内の領域を越える表現や、隙間にヘビを通す表現の可能性から、他のミニチュアと比べてヘビは、侵入の表現をさせやすいミニチュアと考えられるためである。

【伝承や神話との関わり】においては、ヘビが美男子に化けて女性のもとに通い続けて、女性にヘビを身籠らせる（八田ら、2010）などの物語が挙げられる。

ヘビが侵入的な表現をした箱庭の事例は、岩岡（2010）、渋谷（2011）、塚越（2015）が挙げられる。侵入は、岡田・木村（1980）の研究において、侵入、湧き出した感じで、問題を暗示したヘビと類似していると考えられる。事例と研究から、箱庭における侵入の表現として、ヘビが使用される可能性が考えられる。

概念化されなかったが擬人化と思われるものでは、悪と関わるヘビについて語られた。伝承や神話では、悪の蛇王アジ＝ダハーカは「古代イランの神話における最大の悪者」（大林ら、2005）などが挙げられる。ヘビのイメージと悪が結びつくのは、【人間との関わり】における〔存在としての恐怖〕、〔人間への攻撃〕、〔嫌悪感〕から考えられる。

箱庭の事例におけるクライアントの語りとして、菅（1991）では「世界に悪が広がったところ」、吉田（2002）では「悪玉がヘビたちを操っている」とある。

第V章 結論と課題

本研究において、箱庭におけるヘビの意味は多義的であることがわかった。また、それらは概念として生成され、カテゴリーとしてまとめることができた。象徴化されたヘビを理解する際に、箱庭でどのように使用されており、それは制作者の何を反映しているのかを、【動物的側面】、〔嫌悪感〕、【擬人化】などから考えることで、仮説に繋がるかもしれない。しかし、具体例の少なさによって概念にならなかったものや、語り、表現されていないものがある可能性から、具体的な意味が増え、概念やカテゴリーが変化する可能性が考えられる。

本研究の課題として挙げられるのは、ヘビを扱うことを事前に伝え、制作された箱庭に追加するという、実際の箱庭制作の手続きとは異なることだと考えられる。このことから、箱庭の事例や研究をいくつか挙げているが、制作過程の違いを考慮したい。また、調査協力者数が不足していると感じられ、事前にヘビのミニチュアを扱う告知による影響もあると考えられる。

これらの課題を解決するには、自由に箱庭を制作した後、ヘビを使用した者のみを分析の対象とすることだと考えられる。これにより、ヘビを扱う告知や、ヘビを追加せずに済むという実際の箱庭制作の手続きを踏めると思われる。しかし、ヘビを使用しない可能性も考えられるので、大人数の調査協力者が必要になると予想される。

謝辞

本論文を執筆するにあたりまして、調査協力者募集の機会を提供していただき、また終始ご指導いただきました田中信市先生に、心より感謝の意を表します。調査にご協力いただきました皆さま、ご助言いただきました妙木浩之先生、田中ゼミの皆さまに深く感謝申し上げます。

引用文献

- 荒川 紘 (1996). 『龍の起源』. 紀伊國屋書店, 92.
- Clébert, J. P. (1971). *Dictionnaire du Symbolisme Animal*. Albin Michel. 西村哲一・Rocher, A.・瀬戸直彦・竹内信夫・柳谷 巖 (訳) (1989). 『動物シンボル事典』. 大修館店, 308-327.
- 榎戸美佐子 (1993). 多彩な症状を訴えた母のいない少女の箱庭療法. 『箱庭療法学研究』, 第6巻, 第2号, 3-15.
- 長谷川千紘 (2012). 箱庭療法における物語作り法の検討. 『箱庭療法学研究』, 第24巻, 第3号, 35-51.
- 八田夕香・比嘉清和・伊禮 樹・金城友美・宮城昭美・縄田雅重・島田由利佳・玉城 拓 (2010). 沖縄の伝承をたずねて 本格昔話編. 沖縄市文化財調査報告書第38集, 9-31.
- 弘中正美 (2002). 玩具. 荒木ひさ子・今西 徹・入江良平・河合隼雄・近藤隆夫・二里文美・織田尚生・岡 昌之・岡田正幸・岡田康伸 (編著)・奥平ナオミ・リース滝幸子・齋藤 眞・シェリー蓮夢シェパード・東城久夫. 『箱庭療法の現代的意義』. 至文堂, 86.
- 生島博之 (2020). 夫や実母や娘との関係に苦悩する35歳女性のカウンセリング過程と箱庭. 『箱庭療法学研究』, 第32巻, 第3号, 67-79.
- 伊藤久美子 (2008). 色彩好悪と色彩象徴の経年比較. デザイン学研究, 第55巻, 第4号, 31-38.
- 伊藤真理子 (2005). イメージと意識の関係性からみた箱庭制作過程. 『箱庭療法学研究』, 第17巻, 第2号, 51-64.
- 岩岡眞弘 (2010). もりのなか. 『箱庭療法学研究』, 第22巻, 第2号, 35-48.
- Jung, C. G. (1976). Zur Psychologie des Kindarchetypus, In GW9/1. 杉浦忠夫 (訳) (1975). 『神話学入門 (幼児元型の心理学のために)』. 晶文社, 103-138. 林 道義 (訳) (1999). 『元型論 (幼児元型)』. 紀伊國屋書店, 190.
- 上手健太郎・福本幸夫・小宮直孝・山岡和子・松田一哉・岡本 実・村松康和・谷山弘行・浅川満彦 (2012). 国の天然記念物岩国のシロヘビ (*Elaphe climacophora*) から見出された寄生線虫. 獣医畜産新報, 第65巻, 第9号, 753-756.
- 春日菜穂美 (2012). 青年期女性におけるコスモロジーの形成. 『箱庭療法学研究』, 第24巻, 第3号, 69-82.
- 河合隼雄 (1967). 『ユング心理学入門』. 培風館, 121.
- 河合隼雄 (編) (1969). 『箱庭療法入門』. 誠信書房, 3-9.
- 川合伸幸 (2024). Japanese monkeys rapidly noticed snake-scale cladmed salamanders, similar to detecting snakes. Scientific Reports, 14, Article number : 27458 (2024). <https://www.nature.com/articles/s41598-024-78595-w> (2025年3月更新)
- KIM, Bo Ai (2007). Starting on a Journey in Search of Myself : A case Study of Sandplay Therapy with a Middle-aged Man in Identity Crisis. 西浦太郎 (訳) (2007). 本来の自分を探し求める旅をはじめて アイデンティティの危機に陥った中年男性との箱庭療法 (事例研究). 『箱庭療法学研究』, 第19巻, 第2号, 79-94.
- 木村正徳 (2001). 母親同室の箱庭療法過程. 『箱庭療法学研究』, 第14巻, 第1号, 57-69.
- 木村晴子 (2019). 『箱庭療法——基礎的研究と実践』. 創元社, 31-32.
- 木下康仁 (2007). 『ライブ講義 M-GTA——実践的質的研究法 修正版. グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』. 弘文堂.
- 小島環禮 (編著) (1991). 日常生活のなかの蛇. 飯豊道男・西脇隆夫・大林太良・矢島文夫. 『蛇をめぐる民俗自然誌 蛇の宇宙誌』. 東京美術, v.
- 三宅 永 (2022). 心身症の高校生女子への箱庭療法過程. 『箱庭療法学研究』, 第35巻, 第1号, 3-15.
- 茂木貞純 (監修) (2018). 『神社のどうぶつ図鑑』. 二見書房, 51, 57.
- 西海太介 (2018). 自然体験指導者層と一般層の間のヘビに対する印象差異の分析. 日本環境教育学会, 第27巻, 第3号, 12-24.
- 野口 浩 (2020). プレイセラピーがつかなく内と外の身体イメージ. 『箱庭療法学研究』, 第33巻, 第1号, 51-64.
- 織田法子 (1996). 箱庭と描画を用いた青年期男子分裂病者の治療例. 『箱庭療法学研究』, 第9巻, 第2号, 3-13.
- 織田法子・北瀬寛子 (2003). 砂と容器. 『箱庭療法学研究』, 第16巻, 第1号, 51-64.
- 尾上由起 (2015). 箱庭においてセラピストが「遊ぶこと」の意義. 『箱庭療法学研究』, 第28巻, 第1号, 33-44.
- 荻原はるみ・長坂正文 (2013). 分離不安をかかえ

- た不登校男児の遊戯療法. 『箱庭療法学研究』, 第25巻, 第3号, 53-64.
- 岡田康伸 (1984). 『箱庭療法の基礎』. 誠信書房, 21-22, 130-133.
- 岡田康伸・木村晴子 (1980). 箱庭療法に関する研究——箱庭作品におけるヘビ——. 日本心理学会大会発表論文集, 第44回, 623.
- 老松克博・浜崎 豊・田中雄三 (1991). 癒す力としての「中心」と「怒り」. 『箱庭療法学研究』, 第4巻, 第2号, 37-48.
- 大林太良・伊藤清司・吉田敦彦・松村一男 (編) (2005). 『世界神話事典』, 角川書店, 359-360.
- 太田秀樹 (2011). 重篤な精神病理を持つクライエントの箱庭表現への理解に関する臨床心理学的研究. 『箱庭療法学研究』, 第23巻, 第2号, 23-37.
- 大重恵子・岡田あゆみ・山中絵里子・細木瑞恵 (2007). いじめを契機に不登校となった女兒(小4)の箱庭療法. 『箱庭療法学研究』, 第20巻, 第1号, 35-46.
- 坂井朋子 (2018). 「私」をおさめる箱庭. 『箱庭療法学研究』, 第31巻, 第1号, 41-52.
- 佐々木麻子 (2011). 「内的な異質性」の検討 箱庭に置かれなかったアイテムを通して. 『心理療法学研究』, 第29巻, 第1号, 49-61.
- 渋谷恵子 (2011). 自傷を繰り返す女性の箱庭療法過程. 『箱庭療法学研究』, 第23巻, 第2号, 5-22.
- 菅佐和子 (1991). 母性とのかわりという視点からみた心因性視覚障害児の箱庭療法. 『箱庭療法学研究』, 第4巻, 第2号, 24-36.
- 田原義太慶・福山伊吹・福山亮部・堺 淳 (2024). 『日本ヘビ類大全』. 誠文堂新光社, 256.
- 高田夏子 (1993). 0歳代で母性剥奪を体験した女性の箱庭療法過程. 『箱庭療法学研究』, 第6巻, 第2号, 73-84.
- 高野祥子 (1988). 壮絶な破壊の続いた幼児期虐待孤立児の箱庭療法過程. 『箱庭療法学研究』, 第1巻, 第1号, 47-60.
- 田中信市 (1990). 箱庭における中心化と内的コスモロジーの再構築. 『箱庭療法学研究』, 第3巻, 第2号, 57-67.
- 田中慶江 (2002). いじめにあった中学2年生女子の箱庭・はり絵・折り紙遊び. 『箱庭療法学研究』, 第14巻, 第2号, 17-32.
- 谷川健一 (2012). 『蛇 不死と再生の民俗』. 富山房インターナショナル, 173.
- 鏑幹八郎 (1973). 夢, 神話等における蛇のイメージ——情動表現の臨床心理学的考察——. 広島大学教育学部紀要 第一部, 広島大学教育学部 (通号22), 267-282.
- 辻 映子 (2012). 養育不全の環境におかれた子どもへの箱庭療法. 『箱庭療法学研究』, 第29巻, 第3号, 83-97.
- 塚田裕子 (1991). 空気嚥下症の少年に対する箱庭療法. 『箱庭療法学研究』, 第4巻, 第1号, 48-58.
- 塚越康子 (2015). 児童養護施設における被害児との遊戯療法過程. 『箱庭療法学研究』, 第28巻, 第1号, 45-56.
- Vries, A. (1974). *Dictionary of symbols and imagery*. North-Holland Pub. 荒このみ・上坪正徳・川口紘明・喜多尾道冬・栗山啓一・深沢 俊・福土久夫・竹中昌宏・山下主一郎・湯原 剛 (訳) (1984). 『イメージ・シンボル事典』. 大修館書店, 562-568.
- Warburg, A. (1988). *Schlangenritual*. Ein Reisebericht, Berlin. Berlin: K. Wagenbach. 三島憲一 (訳) (2008). 『蛇儀礼』. 岩波書店, 74.
- 安田喜憲 (1994). 『蛇と十字架 東西の風土と宗教』. 人文書院, 49.
- 吉田みを子 (2002). 「自分は自分である」の宝をS氏は確得した. 『箱庭療法学研究』, 第15巻, 第1号, 57-72.
- 吉野裕子 (1999). 『蛇 日本の蛇信仰』. 講談社, 54-55.
- 吉岡恒生・古田祥一郎 (2011). 箱庭の中で誕生を繰り返した広汎性発達障害児の事例. 『箱庭療法学研究』, 第24巻, 第1号, 51-66.
- 吉末素子 (1990). 自立の遅れたY君の箱庭. 『箱庭療法学研究』, 第3巻, 第2号, 44-56.

へびを追加する前と追加した後の箱庭の例



写真1 へび追加前



写真2 へび追加後



写真3 へび追加前



写真4 へび追加後



写真5 写真4の拡大写真

資料1 箱庭の研究論文におけるヘビ

『箱庭療法学研究』（1988から2022）における写真と本文から、ヘビを使用したと思われる箱庭の事例を含めた研究論文について、著者と年号、タイトル、巻号とページにまとめた（表2）。2003年から写真は全てカラーになるが、モノクロ写真において、調査者がヘビと誤認したものがある可能性はある。

表2 ヘビを使用したと思われる箱庭の研究論文

著者と年号	タイトル	巻号, ページ
伊藤(1988)	箱庭表現の「深さ」について—眠れる少年—	1(1), p12
岡田ら(1988)	オーストラリアにおける箱庭表現に関する研究	1(1), p22,24
岡田(1988)	ある障害児への箱庭療法	1(1), p29,34
高野(1988)	壮絶な破壊の続いた幼児期被虐待孤立児の箱庭療法過程	1(1), p51
D.M.Kalff(1988) (訳)河合隼雄	Beyond the Shadow 影の彼岸	1(1), p90,93
老松(1989)	箱庭治療過程前半にみられる宗教的シンボルの意義	2(1), p33
林ら(1989)	ファンタジー, コスモロジー, 体験の共有	2(1), p55
秋田(1990)	二重人格を呈したヒステリーに対する箱庭療法	3(1), p10
三浦(1990)	ある登校拒否児の遊戯療法過程	3(1), p28
Katherine(1990) (訳)川崎克哲	Sandplay Journey of a 45 Year Old Woman in Five Sessions 5回の箱庭療法を通して示された45歳の女性の旅	3(1), p70,71
下山(1990)	「関係性」仮説からみた箱庭療法の治療的意味	3(2), p19,20
吉末(1990)	自立の遅れたY君の箱庭	3(2), p51
田中(1990)	箱庭における中心化と内的コスモロジーの再構築	3(2), p61
片坐(1990)	サンドプレイ・ドラマ法の試験的適用	3(2), p82,86
島田ら(1991)	心身症者が箱庭の前に立つとき	4(1), p12
塚田(1991)	空気嚙下症の少年に対する箱庭療法	4(1), p51,55
林(1991)	月経周期にそってみられる情動の変化についての基礎的研究	4(2), p11,12
菅(1991)	母性とのかわりという視点からみた心因性視覚障害児の箱庭療法	4(2), p28,29
老松ら(1991)	癒す力としての「中心」と「怒り」	4(2), p38,39
斎藤(1992)	不登校児の箱庭表現に関する数量的研究	5(1), p47

石川(1992)	シンナー乱用少年に対する共同箱庭の事例	5(2), p8
Sherry(1993) (訳)康智善	Torii : Gate to the Self 自己の門としての鳥居	6(1), p61
榎戸(1993)	多彩な症状を訴えた母のいない少女の箱庭療法	6(2), p10
犬塚(1993)	過度に服従的な男児の箱庭療法過程	6(2), p27,28,31
高田(1993)	0 歳代で母性剥奪を体験した女性の箱庭療法過程	6(2), p75
濱田(1994)	「物語を表現する空間」と「物語が展開する空間」	7(2), p30
岡田(1995)	初老期を迎えようとする主婦の変容過程	8(1), p4,6,7
川崎(1995)	ある中年男性身体障害者のグループによる成長	8(1), p27,29
安倍ら(1995)	心因性視覚・聴覚障害を呈した児童の箱庭療法の経過	8(1), p39
Navone(1995) (訳)久野晶子	The Case of Giuseppe ジュゼッペの事例	8(1), p47
橋本(1995)	箱庭の物語が「生きられる」ようになるまで	8(2), p6,7
Remus- Everling(1996) (訳)仁里文美	Bringing the Abyss 深淵への架橋	9(1), p44,47
織田(1996)	箱庭と描画を用いた青年期男子分裂病者の治療例	9(2), p7
Reece-Taki(1996) (訳)松浦ひろみ	Sandplay Process of a Boy with Complex Partial Seizures てんかん部分発作をもつ男児の箱庭過程	9(2), p71
野副(1997)	箱庭療法過程の見方に関する研究	10(2), p35
三宅(1998)	「異界」体験としての遊戯療法過程	11(1), p6,9
Nehama(1998) (訳)北口雄一	One Little Boy-One Big Flood 一人の少年と大きな洪水	11(1), p60
吉田ら(1998)	いわゆる「中年期の危機」を乗り越えた男性の軌跡	11(2), p43,44
木村(1999)	箱庭療法適用の可能性をめぐって	12(1), p6
篠原(1999)	ファンタジーにおける疎隔と癒やし	12(2), p28
木村(2001)	母親同室の箱庭療法過程	14(1), p59,60,61

田中(2002)	いじめにあった中学 2 年生女子の箱庭・はり絵・折り紙遊び	14(2), p24,26
大住(2002)	解離性障害の女子への箱庭と描画	15(1), p46,48
吉田(2002)	「自分は自分である」の宝を S 氏は確得した	15(1), p60,62,64
岸井(2003)	「ドラマの場」としての箱庭	15(2), p7
伊藤(2003)	心身症児の箱庭療法の過程とその有効性について	16(1), p45
織田ら(2003)	砂と容器	16(1), p54
宮川(2005)	高齢者による箱庭制作の試み	17(2), p45
伊藤(2005)	イメージと意識の関係性からみた箱庭制作過程	17(2), p55
高野(2005)	fetishism に陥った少年の箱庭療法	18(1), p19
伊藤(2005)	第 1 回講演会「箱庭表現とクライアントの在り方」箱庭療法学研究 1(1)より『箱庭表現の深さについて』	18(1), p146,148,152
友久(2006)	心理療法におけるイメージの意味	19(1), p23
小塚(2006)	「疲れ」として感情表現する男性への言語的介入と箱庭療法過程	19(2), p9
長田(2007)	アバシー学生の心理面接におけるイメージの役割について	19(2), p70,71
KIM(2007) (訳)西浦太郎	Starting on a Journey in Search of Myself 本来の自分を探し求める旅をはじめて	19(2), p81,82,85,87,88
岡田(2007)	第 2 回研修会 「箱庭療法の展開」	19(2), p111,113
大重ら(2007)	いじめを契機に不登校となった女兒(小 4)の箱庭療法	20(1), p38
高橋(2007)	不登校女子中学生との 3 年間の心理療法過程	20(1), p65,66
大田(2008)	仲間集団に参加する為の攻撃性統制を獲得する過程	20(2), p22
近田(2008)	全頭脱毛症を呈する幼稚園女兒の遊戯療法過程	21(1), p21
Joerg(2008) (訳)畑中千紘	The Kraken クラーケンー大蛸	21(1), p69
山中(2009)	2008 年度第 2 回研修会 「箱庭療法のこれから」	21(2), p123

岩岡(2010)	もりのなか	22(2), p37,38
ZHANG(2010) (訳)岩城晶子	Sandplay Therapy For An Undergraduate Girl With Obsessive —Compulsive Disorder 強迫性障害をもつ大学生女子との箱庭療法過程	22(2), p78
渋谷(2011)	自傷を繰り返す女性の箱庭療法過程	23(2), p7,8
太田(2011)	重篤な精神病理を持つクライアントの箱庭表現への理解に関する臨床心理学的研究	23(2), p29
Chiaia(2011) (訳)森崎志麻	Dark Radiance 闇の輝き：魂の風景	23(2), p87,90
吉岡ら(2011)	箱庭の中で誕生を繰り返した広汎性発達障害児の事例	24(1), p58
山元(2011)	分離不安傾向のある女兒との箱庭療法過程	24(2), p57
TAKATA(2011) 高田夏子	Art Therapy for a Client with Dissociative Identity Disorder 解離性同一性障害のクライアントに対するアートセラピー	24(2), p104,105,106
北添(2012)	広汎性発達障害のある大学生の心理療法過程	24(3), p22
長谷川(2012)	箱庭療法における物語作り法の検討	24(3), p44
春日(2012)	青年期女性におけるコスモロジーの形成	24(3), p72,73,74,75,76,77
辻(2012)	養育不全の環境におかれた子どもへの箱庭療法	24(3), p85,86,87,88,90
Taki-Reece(2012) (訳)井芹聖文	Sandplay Therapy for an Eighteen-year-old Autistic Youth 自閉症の18歳青年との箱庭療法	25(1), p79
久保(2012)	箱庭にみる思春期男子のイニシエーション	25(2), p28
萩原ら(2013)	分離不安をかかえた不登校男児の遊戯療法	25(3), p55,56,57,58,59,60
Hatanaka(2013)	From Dual Personalities to Reflected Adult Consciousness in the Psychotherapy of Dissociative Identity Disorder 解離した人格から反省された大人への意識へ	25(3), p94,95,96
千葉(2013)	箱庭を語ることにおけるイメージ変容の体験	26(1), p25
北添(2013)	社交不安障害の大学生の箱庭療法過程	26(1), p49

古市(2013)	運動と社会性の発達に障害がある男児の箱庭療法過程	26(2), p66,67,69
Zhang et al. (2013) (訳)皆本麻実	The Process and Effects of Sandplay Therapy on Obsessive-Compulsive Symptoms in An Undergraduate 大学生の強迫症状に対する箱庭療法のプロセスと効果	26(2), p85
Taguma(2014) 田熊友紀子	“Playing” and the Child Archetype “遊ぶこと”と子ども元型	26(3), p85
Adelina(2014) (訳)神代未人	Leaving My Father's House 父の家からの出立	27(2), p77
尾上(2015)	箱庭においてセラピストが「遊ぶこと」の意義	28(1), p35,37
塚越(2015)	児童養護施設における被虐待児との遊戯療法過程	28(1), p47,49
田中(2015)	夫婦関係で悩む 40 代女性との心理療法	28(2), p22
近藤(2015)	性的虐待が疑われた女兒のプレイセラピーの経過	28(2), p33,34
瀬川(2016)	「育てられる者」から「育てる者」への変容のプロセス	29(1), p10
角田(2016)	軽度に発達障害傾向のある場面緘黙女子中学生の箱庭療法	29(2), p34,35
田附ら(2017)	発達の偏りとプレイセラピーにおける変容	29(3), p17,20
千葉(2017)	特別養護老人ホームにおける認知症高齢者の継続的な箱庭制作について	29(3), p55
清水(2017)	糖尿病合併症を抱えて生きる体験世界への理解の試み	30(2), p68
高石(2017)	箱庭療法と風景構成法	30(2), p85,97
坂井(2018)	「私」をおさめる箱庭	31(1), p44
平田(2019)	箱庭制作者の主観的体験に関する質的研究	31(3), p22
坂本(2019)	児童養護施設内でのプレイセラピーにおける「つながり」と「境界」についての一考察	32(1), p33
坂井(2019)	「何もしていない」透析患者との心理療法	32(2), p50,51
石川(2019)	「砂漠」での遭難、「伝説の卵」を探す旅	32(2), p64
豊原(2020)	心理療法における〈遊び〉の生成と展開	32(3), p59,60
生島(2020)	夫や実母や娘との関係に苦悩する 35 歳女性のカウンセリング過程と箱庭	32(3), p75

田熊(2020)	箱庭と主体の生成に関わる現代のトリック スター	32(3), p92,93
野口(2020)	プレイセラピーがつなぐ内と外の身体イメ ージ	33(1), p54,55
梶原(2020)	長期入院経験のある思春期男児の箱庭療法	33(2), p34
Ruth(2021) (訳)豊原響子	Dreaming with the Hands 手で夢見ること	33(3), p96,98,99,100,101
茂(2021)	児童相談所における子どもの箱庭表現と家 族の変容	34(1), p32
Hasegawa(2022) 長谷川千紘	The Establishment of I in Preadolescence 前 思春期における「私」の確立	34(3), p53
山中(2022)	私の箱庭体験から	34(3), p82,83
三宅(2022)	心身症の高校生女子への箱庭療法過程	35(1), p7

資料2 ヘビがいる箱庭の事例研究のテキストマイニング

事例研究とテキストマイニングツールについて

『箱庭療法学研究』(1988から2022まで)から、箱庭でヘビを使用した98名の事例研究の本文(ヘビのいる箱庭について言及された本文)と考察(ヘビのいる箱庭の考察)を、テキストマイニングツールであるKH Coder3.Beta.03iを使用して、共起ネットワーク図(図2から図3)として示した。

なお、語を抽出する際に、特徴的ではないと思われる語を除いており、表3に総抽出語数などもあわせて示している。本文と考察のテキストデータにおける語の「蛇」、「大蛇」、「大ヘビ」、「海蛇」は「ヘビ」に、頻出すると思われる語の「鱈」は「ワニ」に統一している。

結果と考察

本文と考察の共起ネットワーク図から、全体的な特徴や、ヘビに関わるとと思われる語について考察する。

本文の共起ネットワーク図(図2)では、箱庭のどこに何が置かれたかなどの説明が全体的な特徴として考えられる。98名の事例から181の箱庭を9分割して、ヘビがどの領域に置かれたかを調べたところ、67の箱庭が5の領域である中央に最も多く置かれており、約37%の割合であった。

ヘビのいる箱庭に置かれるミニチュアは「木」、「恐竜」、「ワニ」、「ゾウ」、「橋」、「人」、「鳥」、「鐘」、「石」が挙げられる(図2)。

「木」はヘビの生息環境に関わると考えられる。「木」を「並べる」ことで森の表現に繋がり、そこにヘビを置くことで、不気味なもの、潜むものなどの意味をもつ可能性が考えられる。

動物は「恐竜」、「ワニ」、「ゾウ」、「鳥」が挙げられる。「恐竜」と「ワニ」は、鱗、牙、噛みつくイメージがヘビと類似していると考えられる。「恐竜」、「ワニ」、ヘビは、攻撃的なイメージから、考察の共起ネットワーク図(図3)における「攻撃」、「戦い」に関わると考えられる。

「ゾウ」の大きい身体、4足歩行、植物食という生態は、動物のミニチュアの中で比較的、安定感

や安心感に繋がるかもしれない。ヘビのように、恐怖を感じられると思われる動物を箱庭で扱う際に、ゾウは箱庭世界のバランスに繋がるミニチュアの1つかもしれない。

「鳥」はヘビと対になる動物だと思われる。地を這う、空を飛ぶといった違いから、地と空の対以外に、ヘビは鳥や鳥の卵を狙い、ヘビは猛禽類などの鳥に狙われることから、対立する関係だと考えられる。箱庭で表現されたヘビと「鳥」の関係性は、箱庭を解釈するうえで注目できる視点かもしれない。

「人」とヘビの関係も注目できると思われる。「人」はヘビに対するネガティブなイメージがあると考えられ、箱庭において、ネガティブなものと出会った際の表現を見ることができると考えられる。また、「人」と「食べる」は繋がりをもち、「人」が食べられる表現ならば、箱庭制作者の不安、恐怖の側面が関わると考えられる。

動植物、人間以外に「橋」、「鐘」、「石」が挙げられ、無機物としてまとめられる。「橋」は「川」を安全に渡ることができることから、川に潜むワニや、泳ぐヘビのような危険な動物が存在する世界では、「橋」は安心、安全なものとして考えられる。また、「橋」が2つの領域を繋ぐ意味では、本能的、動物的な側面との繋がりをもちものとして考えられる。

「鐘」は、音を鳴らして何かを伝えるものだとすれば、箱庭制作者が伝えたいことや、伝えようとする思いが「鐘」として表現されるかもしれない。ヘビと共に使用されることで、危険なものへの警告、恐怖や不安の伝達など、様々な意味をもつ可能性が考えられる。また、「鐘」が箱庭制作者にとって大切なものだとすれば、それを守るヘビとして使用する可能性がある。

「石」は、箱庭では静的、重さのあるもの、価値のあるものなどとして使用されるかもしれない。価値のある「石」とヘビの組み合わせは、ヘビが守るものとして使用される可能性が考えられる。また、「石」の下にヘビを置くことで、表に出ていない箱庭制作者の内面や、プレッシャーに潰される側面など、様々な表現や意味が考えられる。

以上のことから、ヘビと他のミニチュアの組み合わせや関係性により、表現と意味が多様になる場合だけでなく、「恐竜」、「ワニ」などがもつヘビとの類似点から、意味が絞られる場合があると考えられる。

考察では、共起ネットワーク図(図3)から、箱庭の解釈に関する語が全体的な特徴として考えられる。

「母親」と「呑み込む」という語の繋がりは、否定的な母性から解釈されていると考えられる。ヘビが卵などを丸呑みにする生態が、否定的な母性の解釈の背景に関わると考えられる。

解釈の背景に関わる生態では丸呑み以外に、脱皮が考えられる。ヘビの脱皮による抜け殻と綺麗な身体は、「死」と「再生」の繋がりに関わると考えられる。

生態が機能するには動物的、本能的な「エネルギー」が必要であり、ヘビなどの動物の表現は、箱庭制作者の内的な「エネルギー」として解釈されていると考えられる。

内的な「エネルギー」は、攻撃的な側面に繋がると考えられる。「攻撃」は、箱庭制作者の攻撃的な側面の1つとして解釈されていると考えられる。攻撃的な側面の背景には、箱庭に表現された「戦い」、「恐竜」、ヘビの攻撃的なイメージが関わると考えられる。

ヘビの攻撃的なイメージや「戦い」は「混沌」に繋がると考えられる。「混沌」という解釈は、竜や大蛇が「混沌」をもたらすという神話から考えられる。また、「混沌」と「心」は繋がりをもちことがわかる。ヘビが人間の生活圏内に侵入し、遭遇した場合、ほとんどの人間は驚きや恐怖を感じると思われる。その際、心の秩序は乱され、無秩序である混沌をもたらすヘビとして象徴されると考えられる。

「混沌」は秩序へと変化する可能性をもつと考えられる。へびが嫌悪感, 恐怖, 不安をもたらすものだとすれば, それらに対処できるようになる可能性があると考えられる。「変容」は「象徴」と繋がりをもつ語であり, へびの象徴的意味が「変容」に関わると考えられる。

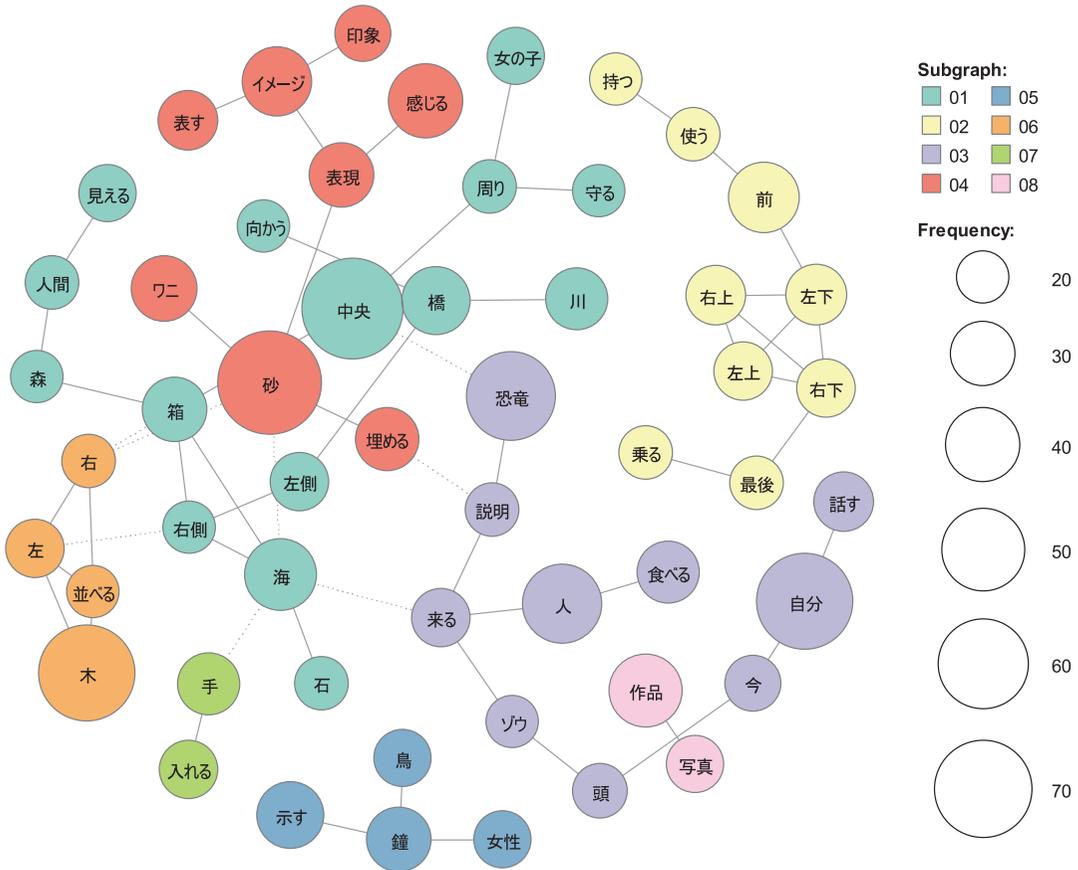


図2 本文の共起ネットワーク図

Abstract

The Meaning of Miniature Snakes in Sandplay

Kazuya Shimpo

The purpose of this study is to examine the meaning of miniature snakes in sandplay. The research participants were seven undergraduate and graduate students. The participants performed sandplay and were interviewed about their descriptions and impressions of the sandplay. In addition, they were asked to add miniature snakes to the sandplay and were interviewed about the snakes. The interviews were analyzed using the Modified Grounded Theory Approach. As a result, 13 concepts were generated, which could be grouped into 5 categories; (1) animal aspects; (2) connection with humans; (3) relation to myths and folklore; (4) sanctification; and (5) anthropomorphism.

キーワード：箱庭，ミニチュアのへびの意味，ミニチュアの追加

Keywords: Sandplay, Meaning of miniature snakes, adding miniatures